

研究論文

## 北海道内小学校における動物介在教育(AAE)の展開に関する提案

今野 洋子<sup>1)</sup> 佐藤 満雄<sup>2)</sup> 舟橋 彰子<sup>3)</sup>

1) 北翔大学 人間福祉学部 福祉心理学科      2) 北翔大学 生涯学習システム学部 学習コーチング学科  
 3) 北翔大学 北方圏学術情報センター

## 抄 録

現在、子どもの心を育てる教育として、国際社会において動物介在教育が推進されている。本稿では、北海道内小学校の動物介在教育(AAE)の実態から課題を把握し、動物介在教育実践校での例等をもとに、動物介在教育(AAE)の展開例と支援体制について提案することを目的とする。

動物介在教育(AAE)の実践校の例から、動物介在教育を学校の教育計画に取り入れるための動物飼育と教科への位置づけおよび獣医師や専門家による動物愛護教室の全校集会案を示した。

キーワード：動物介在教育(AAE)、展開、提案

## I. はじめに

教育基本法<sup>1)</sup>において、「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家および社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」<sup>1)</sup>ことが、教育の目的としてうたわれている。このような目的を実現するため規程された学校教育法21条<sup>1)</sup>では、義務教育の目標10項のうち第2項において、「学校内外における自然体験活動を促進し、生命及び自然を尊重する精神並びに環境の保全に寄与する態度を養うこと」<sup>1)</sup>が示されている。

また、平成22年度より一部先行実施される新学習指導要領<sup>2)</sup>においては、教育基本法等の改訂を踏まえ、子どもたちに生きる力をはぐくむことを目指し、子どもたちが何事にも好奇心を持って意欲的に取り組むように育つことを願い、言語活動、算数・数学や理科教育、道徳教育、体験活動、外国語教育などの充実が図られるようになった<sup>2)</sup>。つまり、「生きる力」の意味や必要性についての共通理解、「生きる力」の理念の共有が基盤となっており、学習指導要領改正の重点は、命を大切にすることを育む教育の充実と言い換えることができよう。

このような命を大切にすることを育む教育の充実は、日本だけでなく世界的な課題であり、そのアプローチのひとつとして、「動物介在教育(AAE: Animal Assisted Education)」が注目されている。

動物介在教育(AAE)は、1995年にジュネーブで開

催された「人と動物の相互作用国際学会(International Conference on Human-Animal Interactions Organizations)」で、5つの決議文のひとつとして「学校の授業にコンパニオン・アニマル(仲間、伴侶としての動物)に関する教育を取り入れ、正しい動物とのふれあい方を通じて、子供たちの心の成長に欠かすことのできない動物の大切さを児童教育に活かす」<sup>3)</sup>ことが採択され、政府や関係各機関へ働きかけが行われた。

その後、2001年リオデジャネイロ開催の「人と動物の相互作用国際学会(International Conference on Human-Animal Interactions Organizations)」において、「動物介在教育(AAE)」は「学校において動物と接する活動」と定義され、主に、獣医師やボランティアなどで構成されるチームが小中学校へ動物を連れて訪問することを通して、子ども達に動物とのふれあいを推奨し愛護精神を培う教育と、学校での動物飼育とを総称したものとされた。また、同学会において、「動物介在教育実施ガイドライン」が宣言された<sup>3)</sup>。ガイドラインが定められた背景には、近年、コンパニオンアニマルとの関わりが子どもたちや若者に良い影響をもたらすことが明らかになってきたことに伴い、子どもたちに対して、適切で安全なコンパニオンアニマルに対する接し方や、種類によって異なるコンパニオンアニマルの正しい飼育方を教えることが重要となったことがある。また、コンパニオンアニマルを活用した学校におけるプログラムが、子どもたちの道徳的、精神的、人格的な成長を促し、学校を中心とするコミュニティに社会的な恩恵をもたらすことが認められてきたことも、その背景要因である。さらに、学校

カリキュラムのさまざまな場面に動物を介することで、学習機会を向上させるという一面もある<sup>3)</sup>。

2007年10月、東京で開催された「人と動物の相互作用国際学会（IAHAIO）」でも、動物介在教育の重要性については基調講演のひとつとして発表され、一般演題等でも子どもたちを対象とした教育や活動の効果について報告<sup>3)</sup>された。

しかし、動物介在教育を学校に導入するための具体的な学習計画や地域における体制づくりについての報告は少ない。

そこで、本研究は、北海道内小学校の動物介在教育（AAE）の実態から課題について整理し、動物介在教育実践校での例等をもとに、動物介在教育（AAE）を学校の教育課程に位置づけられるような展開例について提案することを目的とする。

## Ⅱ. 研究方法

文献研究を行い、まず「北海道四都市における動物介在教育（AAE）の現状と課題—小学校を対象とした質問紙調査から—」<sup>4)</sup>から、北海道内小学校の動物介在教育（AAE）の実態および課題を把握した。

実践例として、「学校犬パティの示すもの—学校における動物介在教育（AAE）の可能性—」<sup>5)</sup>「動物介在教育の試み」<sup>6)7)</sup>「子どもたちの仲間 学校犬パティ」<sup>8)</sup>の例や「小学校における動物飼育活用の教育的効果とあり方と支援システムについて」<sup>9)</sup>における例および「学校市域動物活動の推進について」<sup>10)</sup>における例や「動物飼育と教育」<sup>11)</sup>から教育内容や教育計画への位置づけ、関係者との連携から考える学習内容について内容を整理・検討し、具体例を提案した。

## Ⅲ. 結 果

### 1. 北海道四都市の動物介在教育の実態から

「北海道四都市における動物介在教育（AAE）の現状と課題—小学校を対象とした質問紙調査から—」<sup>4)</sup>において、北海道四都市の全公立小学校対象の質問紙調査（回収率48.7%）から、動物介在教育の一環である「動物飼育」は、約8割の小学校で実施されていることが明らかにされた。しかし、獣医師や専門家による動物愛護教室の活動は、4校を除き、ほとどの学校も取り入れておらず、「動物介在教育（AAE）」ということばについて知っている者は約2割と少なく、北海道における動物介在教育は、「教育的意図を明確にした教育実践としての動物介在教育（AAE）としては不十分である」こと

が課題のひとつとして把握できた。

また、調査からは、「動物飼育」の目的として「生命の大切さに気づかせる」約9割、「思いやりの気持ちを育てる」約6割等、動物飼育への期待が大きいことが捉えられた。しかし、動物飼育の最も大きなねらいである「生命の大切さに気づかせる」に関しては、「生命の尊さを実感できるようになった」「生き物の気持ちを考えるようになった」が2割程度であり、「動物飼育」が効果的に実施され、目的達成を目指すために、具体的な学習の展開例を必要としていることが二つ目の課題として捉えられた。

さらに、動物飼育の困難点として、「長期休業中の飼育」「動物の病気やけが」「土日の世話」「死亡したときの処理」等が挙げられた。一方、近隣の専門家との連携が見られたのは5割弱と少なかったことから、困難点の解消のためにも、学校と獣医師等の専門家との協力体制の確立や協働等、連携が必要であることが三つ目の課題として示された。

### 2. 動物介在教育の意義および実践例

#### (1) 動物介在教育の効果

学校における動物飼育体験が子どもに与えると思われる効果について、中川（2007）<sup>9)</sup>によって、以下のことが報告<sup>9)</sup>されている。

- ①愛する心の育成をはかる
- ②自分への肯定感・自尊心を培う
- ③生命尊重・責任感を養う
- ④謙虚さを知る
- ⑤協力する気持ちを養う
- ⑥人を思いやる心・共感を養う
- ⑦ハプニングへの対応力を高める
- ⑧マザリング効果

これらの効果は、特定の動物を世話しながら飼い続けて、動物への愛着が培われてこそ得られる効果である<sup>11)</sup>。つまり、単に動物を飼育するのではなく、愛情を持って動物に接することにより、効果が得られるのである。

日置（2004）<sup>10)</sup>は、動物飼育の世話による効果を「三項関係をつくる・心的視点移動」ということばを用いて説明している。「三項関係をつくる」とは、友達と自分、親と自分、あるいは先生と自分という関係が動物を介在してのそれぞれの三項関係になることをいう。ともに動物をかわいがり経験を通じて、親や先生との親しみが増すなど、その関係を改善する。また、親や友達との会話や交流を促進する<sup>10)</sup>ものである。「心的視点移動」とは、一緒に動物をかわいがることで、友達との協力や相手の気持ちを考える習慣をつける。また、世話や対象の動物

を思う気持ちを考える。つまり相手の身になって考える力を養う<sup>10)</sup>ことである。このことは、動物飼育が単に子どもと飼育動物との関係にとどまらず、子どもと保護者あるいは子どもと教師、子どもとその友達との関係に影響することを意味する。

また、学校犬バディの例をみると、動物介在教育が学校教育に深くかかわり、学校教育を円滑にする働きを持っていることがうかがえた。子どもたちの不安や緊張を和らげ、『たのしみ』や『やさしさ』を与えてくれる存在として学校犬バディ (Buddy) が誕生したが、バディ (エアデール・テリアの雌) は、男の子の名前であるが、「相棒・仲間・友達」を示すことばである<sup>5)</sup>。学校犬バディは、不登校となっていた児童の「学校に犬が学校にいたら、楽しいだろうなあ…」というつぶやきがかきかけとなって誕生したものであった<sup>5) 6) 8)</sup>。

学校犬の担当者である吉田教諭の聖書科の授業には、バディが毎時間参加し、授業のはじめに一人一人のもとを周って挨拶を交わした後、教室の隅に置かれたドッグベットの上で子どもたちの様子を見守り、子どもたちは動物の持つぬくもりを間近に感じることで安心感やリラックス効果が得られ、かえって授業への集中力が高まる<sup>5)</sup>。日常の学校生活のみでなく、キャンプや保護者会、運動会やクリスマス会などの行事にも参加をしている。

## (2) 「生命の大切さに気づかせる」実践例

前項で述べたように、動物への理解や愛着なしに、心の教育や生命尊重の教育はなしえない。西東京市での実践から、動物飼育体験を行うにあたり、獣医師による導入授業を行ったことで、子どもが動物に関する理解を深め、愛着のある動物を育てることができ、命の大切さを実感できたことが示唆された<sup>9)</sup>。

また、学校犬バディにみる実践例からは、動物飼育の最も大きなねらいである「生命の大切さに気づかせる」ことにつながる直接的な試みがされていた。

2006年、学校犬バディは初めての出産に挑戦し、早い段階から子犬も学校へ登校させ、世話役であるバディ・ウォーカーの6年生の子どもたちを中心としながら、子犬育てを体験させた<sup>8)</sup>。2009年、吉田氏は、二度目の妊娠となったバディの出産に伴い、バディの出産直前の巣づくり行動、出産シーンをビデオ撮影し、「いのち」の誕生の瞬間を子どもたちと共有した<sup>7)</sup>。出産シーンでは子犬を包んでいる羊膜をはがし、へその緒を上手に噛み切って、産まれたばかりの子犬を舐めてやりながら呼吸を促す様子などを見ることができた。

子犬が登校してからは、子どもたちみんなにバディが授乳する様子などを見せた<sup>7)</sup>。音を立ててお乳をのむ子犬たちの懸命に生きようとする姿や、我が子を慈しむよ

うな眼差しで見つめる母親としてのバディから、子どもたちは多くのことを感じ、学ぶことができた。

## (3) 動物介在教育の教科への位置づけの実践と効果

特別活動だけでなく、教科に動物飼育を位置づけることで、「自他に対する肯定感」「共感する心」「支援する態度」「生命尊重」の態度が表現される<sup>9)</sup>ことがわかった。

たとえば、「動物飼育作文」コンクール応募作品からみたところ、動物介在教育が教科位置づけられた学校からの作文すべてに「伝えたいこと」がふれており、動物との関わりだけでなく、人間同士の関わりも記述され、その視点が自分からだけでなく、相手から、あるいは別の角度から縦横に立場を変えて考えているという特徴がみられた。一方、動物介在教育に重点を置いていない学校からの作文には、概念的で、自分自身の考え見られない、周囲に対して批判的な表現がみられる等の特徴が捉えられた<sup>9)</sup>。

学校犬バディの例においても、クラス担任と一緒に、低学年の生活科や総合といった時間を利用して獣医師をゲストティーチャーとして迎え、聴診器で子犬の心音を聞いたり、ワクチンの接種を手伝ったりする体験学習を行った<sup>7)</sup>等、教科に位置づけるなど、教育課程全体を通して学ばせるようにしていた。

## (4) 獣医師や保護者、教育委員会との連携に関する実践

西東京市での実践事例として、動物飼育を位置付けている小学校では、春の保護者会で飼育による教育方針を説明し、「命に休みは無い」ことから休日の世話を親子で一緒にするよう伝え、週末の世話は親子での共同作業となっている<sup>9)</sup>。また、子どもたちに動物への理解と親しみを培うため、獣医師の支援のもとに飼育導入授業を行っている。獣医師との支援体制については、14名の獣医師が市内全小学校19校に毎年定期訪問を行い、支援しながら交流を行っている<sup>9)</sup>。

なお、獣医師と教育委員会および学校という三者による連携地区では、動物の病気やけがの対応がよく、獣医師に飼育動物の健康状態について相談しやすいこと、診療費についての用意があり、治療の必要な動物を放置せずに受診させやすいこと<sup>11)</sup>がわかった。また、動物飼育を担当する教員が獣医師の協力や支援によって、自身に動物をかわいがるゆとりが生まれることも示された<sup>11)</sup>。

学校犬バディの例では、バディの世話は、「バディ・ウォーカー」と呼ばれる6年生の有志が世話を分担している。正式メンバーとなるためには、ドッグトレーナーによるハンドリング講習会の受講、犬の扱い方や日常のケアについての学習が条件<sup>5)</sup>であり、専門家による協力や支援により、子どもたちが正しい飼育について理解し身につけていることがわかった。このような体験を通

し、簡単な服従訓練などにも積極的に取り組みながら、バディとの信頼関係を築いている<sup>5)</sup>のであり、獣医師をはじめとする専門家との連携が欠かせないものであることがうかがえた。

#### IV. 考 察

##### 1. 教育実践としての動物介在教育の位置づけ

北海道の小学校において教育実践として動物介在教育が機能するよう、学校教育における動物介在教育の位置づけを図1に示した。特に、教科への位置づけと、獣医師や専門家の支援や協力による学習の場として動物愛護教室を提案したい。

また、日常の「動物飼育」と「教科での動物介在教育」、獣医師等による特別活動としての「動物愛護教室」について、学年の発達段階に応じて学ぶ必要がある。そこで、教科と日常の動物飼育および動物愛護教室での学習を学年ごとに整理したものを図2～図4として例示した。

1年生・2年生（図2・3）は、日常の動物飼育は高学年の飼育活動の観察や手伝いをしながら、動物飼育の基本を学ぶ。「生活」の授業では、1年生は身近な動物や飼い方を学び、2年生では、町の動物園など地域教材を活用して学びを深める。このような学習に、国語や道徳などでの学びが有機的に関連するとともに、動物愛護教室で学びを深め、日常の活動に還元することができる。動物愛護教室は、1年生では動物にふれる場合の留意点や、ふれた後の手洗いなど、生活の中で動物と共存するためのマナーを学び、2年生は1年時より視野を広げた内容として、動物園の動物にも目を向けて学ぶこととした。

4年生（図4）では、日常の動物飼育を主体的に行うこととし、飼育動物の生態や正しい飼育方法を理解した上で活動する。また、国語の学習では、動物について学んだことをプレゼンテーションできるような能力を育てる。動物愛護教室では、学校飼育動物や家庭での飼育動物など、身近な動物の特徴や飼い方を、獣医師の専門的な立場から学ぶ。

発達段階に応じて、動物への理解を深め、飼育の楽しさや動物への愛情を抱きながら、動物と関わるような教育の機会を提供する必要がある。

図に例示した以外にも、教科での学習として、体育（保健）の中で、「育ちゆくわたし」「心とからだのつながり」「病気のよぼう」等の単元で動物のからだについての学習や動物愛護の精神、人獣感染症について学ぶことができる。図工で動物を題材として絵や粘土作品、音楽での動物を題材とした歌も活用することができる。

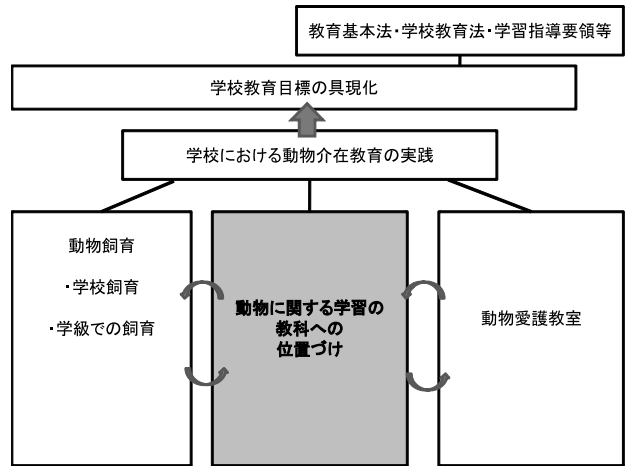


図1 学校教育における動物介在教育の位置づけ

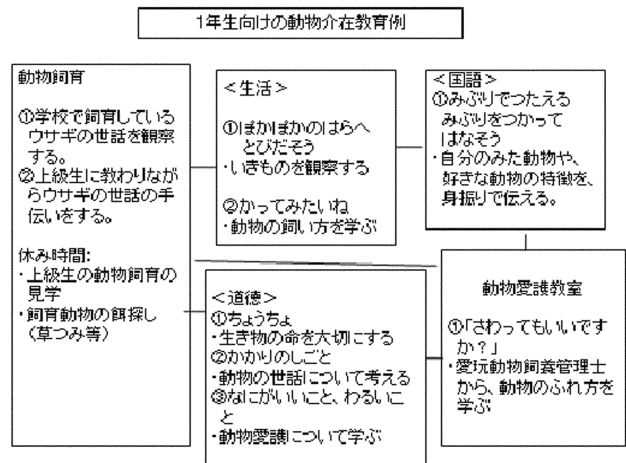


図2 1年生の動物介在教育例

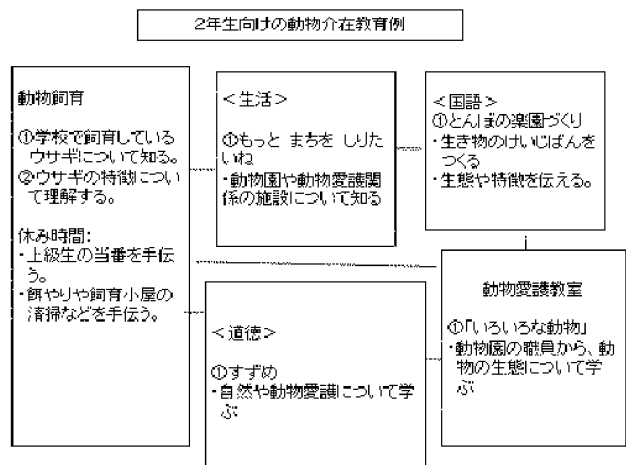


図3 2年生の動物介在教育例

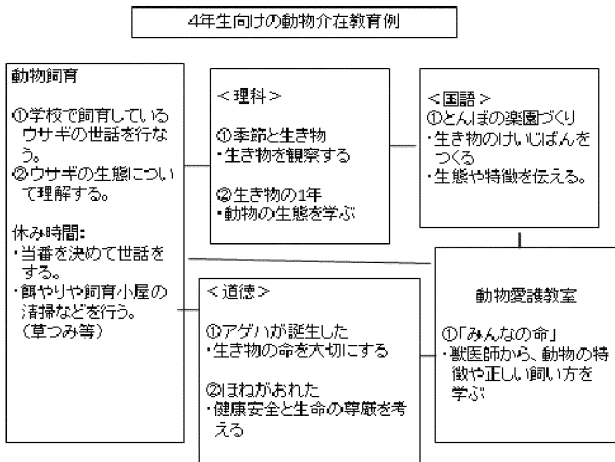


図4 4年生の動物介在教育例

## 2. 獣医師等と連携しての動物愛護教室の内容

獣医師などの専門家による学習の機会を最低年1回は確保したいと考え、発達段階や教科の学習との関連から学ぶべき内容を示したものが表1である。

表1 動物愛護教室の内容(例)

学年	指導者	学習テーマ	主な学習内容
1年	愛玩動物飼養管理士	さわってもいいですか	・動物との事故を避けるため、むやみに動物に触ってはいけないこと、乱暴にさわらないことを学ぶ。 ・散歩中の犬に触りたいとき、必ず飼い主に「触ってもいいですか」と断る。 ・動物にさわったあとは、必ず手を洗う。
2年	動物園の職員	いろいろな動物	・いろいろな動物の種類があり、動物によって育つ環境や世話の仕方が異なることを学ぶ。 ・動物園にはどんな動物がいるのか、動物園にいる動物の特徴や、もともとどんな地域に住んで、どんな暮らし方をしているか、どんなものを食べるかを知る。 ・動物園でのマナーを学ぶ。
3年	獣医師	動物の赤ちゃん	・動物の赤ちゃんが動物のおかあさんの世話を得て、一生懸命生きる様子を知り、命の大切さを学ぶ。 ・生まれたばかりの赤ちゃんの姿を知り、動物のおかあさんが赤ちゃんを必死に守り育てる様子を学ぶ。
4年	獣医師	みんなの命	・人間も動物も同じような器官を持っており、人間も動物も命ある大切な存在であることを学ぶ。 ・人間と動物の心臓の音を聴き比べるなど、体験的に学び、同じ仲間であることを実感する。
5年	愛玩動物飼養管理士	ポチを送る	・動物の死に際し、どうすればよいかを考える。 ・「ポチを送る(小さいころからいっしょに暮らしてきた犬のポチが亡くなり、悲しみ、弔う子どもの話)」という物語を読み、考えを発表する。 ・身近なものの死をどう受け止めるかを考える。
6年	動物管理センター職員	ぼく・わたしと動物が生きる社会	・自治体の動物保護センターに収容される動物の実態について知り、自分たちにできることを考える。 ・動物を飼うときの心構え・責任感を持つ。

## 3. 学校行事としての動物愛護集会

動物愛護週間(9月20~26日)に向けて、学校行事として集会活動などを行うことも考えられた。環境省で作成した資料<sup>12)</sup>を元に、「迷子にしないで」というテーマの集会案を以下に提示する。獣医師などの専門家の活用および全校的な学習の機会として例を示した。

### 資料1 全校集会例

#### 全校集会(動物愛護集会)案

1. テーマ: 「迷子にしないで」
2. 日時: 9月19日(金) 3・4校時
3. 指導者: 愛玩動物飼養管理士〇〇先生・全教員
4. 場所: 体育館(イスを持って並ぶ)
5. テーマ設定の理由: 本校の子どもたちの家の約3分の2以上で動物を飼っている。飼育動物の安全を守るのは、飼い主の責任である。大切な家族の一員を危険にさらさないような対策を理解させ、どのような対策をとることができるかを考えさせる。
6. 展開

	児童の活動	留意点
導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>●校長先生のあいさつ</li> <li>●愛玩動物飼養管理士からの説明を聞く</li> <li>○「全国の自治体に収容される犬・猫は毎年約42万頭です。収容された動物にも飼い主がいたはずですよ。」</li> <li>「かわいそう」</li> <li>「捨てられたのかな」</li> <li>「迷子になったんだ」</li> <li>○「迷子になることも、大きな要因のひとつですよ。」</li> </ul>	<p>パワーポイントでの資料提示</p>
	<p>飼育動物を迷子にさせないためにどうすればいいのかを考える。</p> <p>◇グループで考えたアイデアをカードに書き出す。</p> <p>「首輪をつける」</p> <p>「名前を書いた迷子札をつける」</p> <p>「逃げ出さないように気をつける」</p> <p>「うちの犬みたいに鎖につなぐ」</p> <p>「外に出さない」</p> <p>「かごに入れて運ぶ」</p> <p>◇考えたアイデアを掲示板に貼る</p> <p>◇愛玩動物飼養管理士から、迷子にさせないための方法について話を聞き、自分たちのアイデアを整理する。</p> <p>◎休み時間を10分とる</p> <p>○「飼っている動物がいなくなったらどうしたらいいのでしょうか」</p> <p>◇いなくなったらすぐに探す。探さないのは殺すのと同じである。問合せ先や探すための具体的な方法を知る。</p> <p>○「もし、迷子かなと思う動物を見たらどうしたらいいのでしょうか」</p> <p>◇クイズをしながら学ぶ。</p> <p>まず、保護する。</p> <p>保護した動物の種類は?</p> <p>首輪はしている? …</p> <p>○「明らかに捨てられたという場合は、必ず警察に連絡しましょう。動物を捨てることは犯罪ですよ」</p>	<p>縦割りでの学習班で考える</p> <p>6年生がリーダーシップをとる</p> <p>同じアイデアは重ねて貼る</p> <p>パワーポイントで資料を提示</p> <p>チャート式のクイズを用いる</p>
まとめ	<p>◇今日の集会の感想を用紙に記入する</p> <p>「迷子にはいけない」</p> <p>「迷子にならないよう気をつける」</p> <p>「動物を捨てることは悪いこと」</p> <p>「大事に飼いたい」</p>	

#### Ⅳ. おわりに

本稿では、動物介在教育（AAE）の展開例として教科との有機的な関連付けや学校行事としての動物愛護活動の提案を試みた。学校における動物介在教育（AAE）について、誰もが取り組むことのできるよう具体的な教育計画の提示が必要である。この点において、本研究には課題が残されている。

また、北海道という地域性を生かした展開例の提示という点でも不十分であり、このことも今後の大きな研究課題である。

動物介在教育（AAE）は学校のみにとどまらず、地域での人材等の活用によって、より充実するものであり、社会と学校を結ぶ機会をつくるものである。今後、子どもの健全育成のための社会全体の大きな視点から、動物介在教育（AAE）について検討したい。

#### 【付記】

本研究は、2010年度の北方圏学術センターの研究助成を受けている。

#### 【引用文献】

- 1) 市川須美子：教育小六法 平成21年版，2009
- 2) 文部科学省ホームページ：[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/idea/index.html](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/idea/index.html)
- 3) コンパニオンアニマル・リサーチ：人と動物の関係学，[http://www.cairc.org/j/relation\\_index.html](http://www.cairc.org/j/relation_index.html)
- 4) 今野洋子・尾形良子：北海道四都市における動物介在教育（AAE）の現状と課題—小学校を対象とした質問紙調査から—，北方圏学術情報センター年報，vol2, 2010, pp13-22
- 5) 今野洋子・尾形良子：学校犬バディの示すもの—学校における動物介在教育（AAE）の可能性—，北翔大学システム学部研究紀要，第10号，pp151-163
- 6) 動物介在教育の試み Animal Assisted Education, <http://blog.livedoor.jp/schooldog/>
- 7) 動物介在教育(Animal Assisted Education)の試み, Child Resarch Net 子どもは未来である, <http://www2.crn.or.jp/blog/report/01/50.html>
- 8) 吉田太郎：子どもたちの仲間 学校犬バディ 動物介在教育の試み，高文研，2009
- 9) 中川美穂子：小学校における動物飼育活用の教育的効果とあり方と支援システムについて，お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要，4, 2007, pp. 53-65
- 10) 日置久光：動物飼育と教育，全国学校飼育動物研究

会誌，vol.1, 2004, pp. 53-55

- 11) 日本獣医師会：日本獣医師会学校飼育動物委員会報告，学校飼育動物活動の推進について，2005
- 12) 環境省：捨てないで迷子にしないで，環境省自然環境局総務課動物愛護管理室，2007

# Proposals for development and organization of Animal Assisted Education in elementary school in Hokkaido

Yoko Imano, Mitsuo Sato, Akiko Funabashi (Hokusho University)

## Abstract

The animal assisted education is promoted as an education that raises child's mind in the international society now.

In this text, it aims to understand the problem from the realities of animal assisted education (AAE) of the elementary school in Hokkaido, and to propose the development example and the system of support of animal assisted education (AAE) based on the example in the animal assisted education practice school etc.

The whole school assembly idea of the animal protection classroom caused by the location from the example of the practice school of animal assisted education (AAE) to animal breeding to take the animal assisted education to an educational plan of the school and the subject, veterinarians, and specialist was shown.